



天に上るカボチャ、青空に向かって。大地を這いずるはずが立木を駆け上るご自分で作られた、かんじきで落下防止(若月栄一さん宅)

弥生

雪の少ない冬は、もう春を吸い込み始めている。早くしなければ。どうしても今冬の内ふわた半紙を漉いてみたかった。ふわた紙は「良寛がよよく愛した紙」と良寛研究家の第一人者である、相馬御風の本に記されていた。それを見たのはまだ自分が若かった頃。ふわた紙は別名、『鯖石判』とも言われ、当地から柏崎市内に流れる鯖石川沿いのほんの一部の障子紙として漉かれ、障子の本流である小国半紙(美濃判)よりやや小さく、風の強い海岸沿いや当地域に限られたあまり表に出なかった紙で我が家でも主力は伊沢半紙(A3判)で昔は傘紙や大風用紙で伊沢紙を終えるとはんの少しふわた紙を漉いていた。

小学生の頃、同じ門出地内の農家で秋に原料の楮を届けてくれた家々に、ふわた紙を届けた思い出がある。今の漉き簀は、ほとんど竹ヒゴを編んだもので細く、丈夫で完成度が高いのですが、ふわた紙は今も萱(ススキ)の穂先の一節を馬の尻尾で編み込んである。竹ヒゴより太く、紙をかざして見るとそのヒゴの凹凸が紙面に現れて、その横に伸びる薄い線が何とも奥行きがあつて紙の表情に深みを感じられ美しいのです。



生紙工房和室で黙々とカヤ簀を編む

ふわた紙の名の由来もはつきりしないのですが、「不端紙」(ふわた)から端切らず紙、つまり端を残した耳付き紙であるうと、和紙研究家の久米康生氏の本に記されている。

海岸地域を住処とする良寛の村の障子にも使われていたと思うと、良寛尊敬者としては嬉しくなってくる。しかし近年、注文はほとんどなく、数年に一度漉いていたのですが、その簀も使えなくなつて十数年。簀作りから始めなければと思つたのもその時。以来、

高野山紙

第59号
2024年9月12日発行
越後 門出和紙 小林康生
〒945-1513 新潟県柏崎市高柳町門出
☎0257(41)2361 ☎0257(41)3024
e-mail info@kaidowewashi.com
http://www.kaidowewashi.com
年4回発行 年会費 920円

その想いは自分の中にしまつておいた。三年程前から、秋になると秋山郷や近隣の萱原でヒゴを求めて探しておりましたが、細くて長いヒゴはそう簡単には見つけれず、結局、「手漉き和紙青年の集い 和歌山大会」の時、デモで見せていただいた飯野尚子さんたちの高野紙で使われていたのが萱簀であり、素人ながら自分たちで作っているというではないか、そこを頼ることにした。



5/21 道路拡張のコンクリート打ちは、一輪車部隊、振動係、大ならし、こて撫ぜとスタッフ総動員

三日間、竜神温泉に取り残されたのだ。その飯野さんの計らいで高野山、奥の院裏手の萱原で女房と二人、ヒゴの採取をしたのがちょうど二年前…。

その冬、とうとう簀作りまで出来ず、今冬になつてしまったのだ。ヒゴ数はふわた紙、四、五枚分は作れると思つていたのですが、萱ヒゴの選別を始めると…。そもそも同じ細さのものを寄せると何種類にもなつてしまい、本職の方が作るのであれば一枚の簀として完成しないのであろう。仕方なく、不揃いに目をつぶり、始めた。

最初、絹糸から編み始め、果たして漉いてみると、所々(ヒゴが曲がつた部分)ヒゴとヒゴが接近しすぎて、その部分に原料が残らず薄くなつてしまった。ならば重りを軽くするため鉄骨棒を短くして編んでみたが、それでも同じ現象が残る。そこでしなやかすぎない絹糸に変えて魚釣りの細いテングスを使用してみた。(実は亡き父もテングスを使用していた)何となく試作でそここの紙になつたので、ほんのニキロばかりの我が家の楮を木灰液で煮て、木刀で叩いて漉く。我ながらニタリとする紙が干しあがつた。

しかし、その後バタバタしているうちに、もう冬は完全に春に吸い込まれ、続きは来冬に引き継ぐことにした。この春、二男の悠生の嫁、野乃花さんは着物が好きで我が家の蔵の古いタンスの中を探していたら、何と昭和二十三年の毎日新聞紙に包まれた、ふわた用の何とも細い、細い萱ヒゴがどつさり出てきた。七十六年前のヒゴが果たして使えるかどうか楽しみなことである。

卯月

当工房に新人が三人加わつた。工房始まつて以来のことです。今春、東京工芸高校を卒業した津野海舟君は長身で言葉少ないが正に職人タイプ。良い紙漉きになるに違いない。

二十九歳の齋藤選(スグル)君は、県内出身で大学卒業後、オーストラリアに四年程、アルバイト生活をしながら小さな小さな和紙の盆栽づくりをしている。海外生活で身につけたのか、すこぶる気の回る男で、彼はどこでも生きていくたくましさがある。

中村菜穂さんは、市内の小学校の先生をしていたが、四月から高柳小学校が鯖石小学校に統合されることに伴って四歳の娘さんをじっくり育てたい希望もあり、となりの荻ノ島集落からパートで通勤している。以前、青年海外協力隊に参加、サモアで知り合ったご主人は市内の夢の森公園のスタッフ。



U字溝ふせをする海舟君

この三人の仕事始めは、これから新しく始める『かみわさき家の家』周りの土木工事から始まり、コンクリートの作り方、ならし方、土木工事のイロハである。『かみわさき家の家』は昔、屋号が寿屋さんで十年近く空き家になっていたのを最初は我が父や母の紙わさき家の場であった。その後工房スタッフの寮として使われていた。



かみわさき家の外看板は、我が蔵の前の四季桜(20年前に伐った)の板を自分がわさき文字を彫って、火で黒く焼き付けた

もう四十年(昭和六十年)前になるが門出かやぶきの里、おやけ棟を地域おこしのために水曜会の仲間たちと修復運営を始めた。その六年後(平成三年)門出ふるさと村組合を設立。宿として今の運営に繋がっている。



側溝のコンクリートは手ねり、少しずつ埋める。古材の床板を何度も再利用した型枠設計図なしの現場合わせ工事(抄吾と齋藤君)

高柳町所有財産に移行したので、我々水曜会は次の拠点を探し始め、寿屋を見つけたのであった。

その頃、水曜会のメンバーも三十代半ばとなり、仕事も任せられる立場で思うように集まつて寿屋を修復することが困難になつてきた。やむなく寿屋を自分個人の所有とした経緯があつた。

この時、「自分には相談がなかつた」と女房にすっかり怒られたことも今となっては懐かしい。

通常と異常を合わせて正常だと自分は思つているので、このコロナ禍は正常であり異常時、天が立ち止まつて考えるチャンスを与えてくれるのである。この期間、考えさせられることはたくさんあつた。

自分の住む郷は時間の問題で無くなりそう。行政から見れば辺鄙な集落は無くして集約。効率的にコンパクトシ



八月九日 完成祝いと工房の暑気払いを兼ねて、サーカス小屋のようなBBQ Tentも設営

テイなるものを目指すのは当然である。山奥の村々まで平等にすることなど無理なのである。今までやってきたことさえ、継続が難しくなっている。

端々の者は文句を叫び、少しだけ行政は飴玉を与える。本当に力を失ったところから文句を言える元氣も失っている。しかし、過疎問題は易しい問題である。住所を移すことさえ許されない国もあるし、ましてや戦争をしているところさえあるのだから。ただ、自分がこの郷に七十年、生を受けて、はつきり言えることは、人は五感が豊かでなければ真の幸福感は味わえないことである。

そして、その正常な五感を宿すのは自然であることだ。暑さ、寒さ、難儀を克服してはいけません。そのそれぞれの折り合いをつける生き方を自然は我々に突き付けている。自然の中で暮らすとこの自然素材の不思議な美しさ摂理を理解する。そしてその一部である自分のありがたさは心を豊かにしてくれるのです。

自分に与えられた紙という切り口でやれることは何だろう。

自然素材を普段の暮らしの中に活かしていくにはその使い手と一緒に分かち合いながら形にしていくなことではないか。そうした『場』を造ろう。

葉月

昨年八月、新潟大学の長尾雅信先生のご家族が久しぶりに門出かやぶぎの里へ来られたのですが、今春から奥様とお子さんは神奈川県に引越され、末っ子の杏奈ちゃん鎌倉市にある清泉小学校に入学。クラスの発表会の時、「千年生きる和紙」の話がされたそうで・・・その学校では自然の中での教育を大切にされているようです。



八月二十五日 清泉小学校のご家族による
原始の紙作り。楮を叩きながら一輪差し等を作った

そして、奥様の麻衣さんがクラスの保護者の方をお誘いして、七組のご家族と先生方が八月二十四日から二十七日にかけて「大地の学校体験」で三十名近い方々がお出でになった。

かやぶぎの里では、薪割り、野外風

呂、せんばこぎ、糺摺りなどのコマ物語体験。プナ林ではブランコ。和紙工房では紙漉き、原始の紙作り、草木染の折染めなどの自然体験をしてもらった。とても好評だったようで、お礼の言葉をたくさんいただいで嬉しいことだった。

今後、自分のライフワークである大地の学校計画に繋がっていくような気がする。

《あとがき》

生紙便、とうとう一年間サボってしまった。いつも生紙便は当工房のイベントのお知らせを兼ねているのでその前になると、女房からしつこく命令を受ける。そのイベントはコロナ禍でお休み、そして生紙便もお休みしていました。

久しぶりにペンをとると増々漢字を忘れてしまったが、(生まれて一回もキーボードを押したことがない自分ですが)女房のお陰で先ずは発行。

『かみわさこきの家』計画では五、六月に外周工事を終え、七月からスタッフ(新人)研修に入る予定であったが、畑の草は待ってくれず、楮、ネリの花芽摘みなど、思うようには動けなかった。

自分は上越観光コンベンション協会からの依頼で、七月から八月上旬まで東京都港区の中学校七校(一泊二日)の

田舎体験とベルギーからのファミリィ(二泊三日)四回の対応。

その間をぬうように来客対応と、ほとんど自分の計画された仕事は後々に。



かみわさこきの家・入り口の看板は、厚紙20枚を貼り合わせて作った。放(こく)は、へを放くイメージで少し斜めに。失礼しました! そうしたことをわさこきといいます

どれも自分が必要とされることなので、早く後継者を探せなければならぬ。

九月に入つてようやくスタッフ全員で準備に入れたのですが、まもなく稲刈りが待っているようです。

それでも始めるぞと自分たちに言い聞かせるため、十月十日(木)旗揚げの集いなるものを計画。今、その準備に追われています。

二〇二四年長月十日

小林康生